

究、各種地図の利用と、フィールドワークによる聴取調査等を行うことにする。

## 2. 要旨

板橋区の名の由来は、区内を流れる石神井川に架けられた「板の橋」であると言われている。

板橋の街の骨格が主に定まったのは、江戸時代だといえる。中山道板橋宿は街道の最初の宿場として栄えた。当時の板橋は、江戸の人々の口を賄う農業地帯として、また幕府直轄のお狩場として利用されてきた。

明治9年に、板橋で最初の工場である陸軍の火薬製造所が建てられたが、それに伴う下請け工場の建設もなく、ただそこに工場があったにすぎなかった。

大正時代にはいっても、板橋区は相変わらず閑静な農村であり、東京への農産物の供給地として栄えていた。

しかし、大正12年の関東大震災以後、板橋区は大きく変わった。この関東大震災で都心で家を焼かれた人々が、郊外へと移動してきたのである。この時期から板橋区の人口急増が始まったといえる。

移転してきたのは人だけに限らなかった。工場を焼失した千野製作所や東京光学機械なども板橋区に建設され始め、徐々に志村工業地帯ができあがってきたのである。

当時の板橋地方は、宿場をはずれば、山林と広野の連続で、志村方面から、荒川の氾濫の心配のある北部流域地帯へかけては住宅も少なかった。そこで、この地域は、敷地入手の安易な点、製品輸送に舟運を利用できる利便性から、危険物を取

り扱う軍需工場、爆発性の化学品の製造工場に、好適な地形と条件を提供していたのである。そのため、第2次世界大戦中、板橋は一大軍需工場地帯となった。

昭和22年、この年は地方制度の改革による特別区の誕生、地方自治の制定と、戦後の地方自治の出発点となった。また、この時、板橋区の南部が練馬区として分離独立した。

第2次世界大戦中の軍需中心の板橋区の工業は、終戦を境として一斉に火を消したが、戦後の目覚ましい復興は近代産業興隆の立地条件に適した荒川沿岸・志村・新野町などにまたたく間に城北一の工業地帯をつくり上げ、飛躍し続けてきた。

それと共に、人口も急増していった。そして、昭和41年から、区内に残された唯一の水田地帯“赤塚田んぼ”も、日本住宅公団を施行者として区画整理事業が進められ、巨大な高層住宅団地に変貌した。

高島平の開発は、板橋区の近代化の頂点といえる。人口も昭和7年区誕生時の12万人から、現在50万人を超えるに至り、各地域には近代ビルが林立し、高速道路が走り、首都東京の一面を担う都市景観も出現した。

こうして、板橋区は東京の住宅地域であると同時に、都内有数の工場地域であり、また23区では希少となった農業地域をも包含する街に成長したのである。

今後、板橋区はさらに宅地化が進むと思われるが、現在残された貴重な自然を保護し、健康的な環境づくりを推進していくことが望まれる。

# 神通川中下流地域における土地利用および水利用

神山直子

神通川という一つの河川の中流から下流に目を移動させることで、その沿岸に見られる河川と関係のあると思われるさまざまな土地利用や水利用を調べ、それらの要因を考察するというのが、この論文の目的である。方法は、フィールド・ワークおよびヒアリング調査を行うことで、神通川中下流沿岸<sup>1)</sup>の土地利用や水利用の実態を把握し、

その後、それぞれの利用形態について要因を考察する。

神通川は、富山平野のほぼ中央を南から北に向かって流れており、富山湾に注いでいる。神通川の東を流れる常願寺川と共に、富山平野の中部扇状地群を形成している。神通川は舟倉段丘扇状地を、その下位に大沢野扇状地を発達させた。その

後、大沢野扇状地を侵食して、下流に新扇状地を形成した。神通川の下流は、常願寺川扇状地が発達しているため、呉羽山丘陵側に押しやられ、河川の長さ比べて狭い平野しか形成し得なかった。また、急河川に珍しい中神通の輪中が、西側の段丘に制約されて形成されている。神通川を富山県内の他の河川と比べると、神通川は流域面積が広く、豊水量<sup>2)</sup>と渇水量<sup>3)</sup>の差が著しい。

このような地形を刻む神通川とその流域に展開されている利用形態の関係は、予想以上に密接であった。農業・工業・漁業・電気事業・交通・その他あらゆる面で密接な関係があった。多方面に関連していて、単純に分類できないものもあったが、農業では用水・堤外地の耕地・カドミウム汚染・輪中が、工業では運河沿いの工場群・内陸の工場群が、漁業では鮎・鱒・鮭の養殖場が、電気事業では大規模発電所・低落差の小規模発電所が交通では富山新空港・舟運が、その他では製菓業・河川敷の公園やグラウンド・廃川敷の官庁街が挙げられる。

これらの利用形態には、すべて要因があるが、地域特性による要因と流域特性による要因の二つに大別した。地域特性による要因とは、都

市や村落が存在し、それらが必要としたために、その要求に応じて神通川の水やその流域の土地を使うようになったもので、堤外地の耕地、富山新空港、製菓業、工業用水、土石採取がこれにあてはまる。流域の特性による要因とは、神通川が存在したために、その水の有効利用（中には、結果的に悪用されたものもあったが）を考えた結果生じた利用形態で、農業用水、カドミウム汚染（悪用されたケースである）、輪中、発電所、鮎・鱒・鮭の養殖場、土石採取、工業用水がこれにあてはまる。土石採取、工業用水は、どちらの要因にも含まれるが、これは、ほぼ同等にウエートが置かれていると考えられるからである。

以上のように、河川の流域に見られるたった一つの土地利用、あるいは水利用についても、複雑な要因や社会的背景があるといえる。

- 1) 大沢野町、八尾町、婦中町、富山市を対象地域とする。
- 2) 一年を通じて95日間一定流量を下らない水量
- 3) 一年を通じて355日間一定流量を下らない水量

## 都市の緑に関する考察

——東京都文京区・世田谷区を事例として——

木村 真理子

東京は江戸時代には緑の豊かな都市であったといわれるが、現在は世界でも最も緑の少ない都市の一つとなってしまった。しかし、現在の東京に緑が全く分布していないわけではなく、ある程度の緑は残存している。そこで、本論文ではそれらの緑、特に樹木がなぜ残存しえたのか、その要因を探ることを目的とした。対象地域としては、都心部に位置しながら樹木率の高い文京区と、東京都区部の周辺部に位置しており文京区と同程度の樹木率を示す世田谷区をとりあげた。考察の方法は、両区が行った調査の結果をもとに緑の分布状況を把握した後、両区の地域の現状と緑の関係について考察するため、統計資料をもとに地域変数と樹木率、草地率、緑被率の相関関係を算出した。また、両区のなかから「樹木率の高い地区と低い

地区の両方を含む地域」を1地域ずつと、「樹木率の高い高級住宅地」を1地域ずつとりあげ、江戸時代以降の地図をもとに市街化の過程と緑の関係について考察し、さらに両区の緑に関する施策について聴取調査を行った。

まず両区の現在の緑の分布状況についてみると、文京区では緑の分布に偏在性がみられ、台地上に多く、低地には少ない。特に旧庭園や寺社、大学などが果たしている役割は大きく、これらの公共的・半公共的施設に緑が集中している。一方世田谷区では、多摩川ぞいの低地に緑が少なく国分寺崖線ぞいで多いという傾向や、環状8号線の西側及び国道246号線の南側に緑が多いという傾向がみられるものの、文京区と比較すると緑は全体に平均的に分布しているといえる。また緑は一